

基礎造形教育法における表現志向の影響

久保村 里正*

A Study on the Influence of Art-mindedness in Educational Methods for Basic Design and Art

Risei KUBOMURA

要旨 本研究は先行研究である「造形要素の組み合わせによる造形メソッドの確立と高度メディアリテラシー教育への応用」と、「造形要素のデジタルアーカイブと、その利用による教育および作品評価システムの構築」によって示された、課題を研究の契機としている。これらの研究で開発した基礎造形教育法は、教員と学生の資質・能力に影響を受けにくいカリキュラムとして、一定の教育効果が確認されている。しかし実際に基礎造形教育法を運用した際に、具象的表現志向の高い学生にとって、造形メソッドとの親和性が低く、能力差ではないものの表現志向の違いによって、教育効果が変わってくるのではないかという事例が出現した。そこで本研究では、実際に授業で作成された学生の作品を元に、表現志向との関係を分析し、以下のような結論が得た。①具象形が出現するのは、個人の嗜好による部分が大きい。②具象形を志向する者の中には一部、心象・イメージを追求し、デザイン的な計画性を軽視する傾向が見受けられる。③具象形が出現する割合は、課題の難易度と具象形との親和性によるところが大きい。

キーワード：基礎造形 造形要素 造形メソッド 具象・抽象 表現志向

はじめに

本研究は久保村が継続的に研究を進めてきた「造形要素の組み合わせによる造形メソッドの確立と高度メディアリテラシー教育への応用」¹および、「造形要素のデジタルアーカイブ²と、その利用による教育および作品評価システムの構築」³の進展から出された新たな課題を研究の契機としている。

Ⅰ 研究背景

小論の主題となっている基礎造形教育法とは、ドイツ・パウハウスでの予備課程における、基礎的な造形教育を起点とする構成教育・基礎造形教育を、久保村が改良・開発した造形教育法である。この基礎造形教育法は、①造形要素の構造化、②造形要素の組み合わせによる造形メソッド、③積

み上げ式のカリキュラム（階層型カリキュラム）の3つの柱から成り立っており、教育課題と内容を構造的に示すことによって、学生の個人的な資質の有無に依拠しない、造形教育を行うことができるという特徴を持っている。また、指導者の資質によって発生する教育水準のムラを解消し、全体的な教育水準の向上と学生個人の能力の伸長を図る事が期待される造形教育法であり、実際に、開発した基礎造形教育法を岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科の授業「基礎造形」で運用した結果、一定の教育効果が確認されている。⁴

しかし、開発された基礎造形教育法の運用を重ねた結果、一部で企図していた教育効果が得られない事例（作品）が発生した。これらの発生した事例は、複数存在し、類似した傾向を持っていた為、その制作された作品の幾つかを一瞥したところ、比較的、高評価の作品に抽象的表現が、低評価の作品に、具象的表現が散見され、表現志向と

*くぼむら りせい 文教大学教育学部学校教育課程美術専修

ムでは、15週に渡って、徐々に難易度が上がる課題を設定している。(表.3)

2 基礎造形教育法における課題

基礎造形教育法は、「全ての造形活動の基礎」という基礎造形の概念に基づき開発し、実際の基礎造形の授業で利用されている。現行の基礎造形のカリキュラムでは、15週に渡って徐々に難易度が上がる課題を設定している。今回、研究として扱う課題は、基礎造形教育法で定められている課題のうち、「平行線による構成 透明視」、「ネガティブな線の構成 断線」、「ネガティブな線の構成 欠線」、「欠損した円の構成」、「同形分割と等量分割」、「同形単一ユニットによる平面充填」の6課題である。これらの課題は実際に基礎造形教育法を授業で行った際に、造形メソッドが効果的に機能せず、「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」に表現志向が分離する例が、顕著に表れた課題である。

3 表現志向に関する分類と評価

実際の授業で基礎造形教育法を用いて学生を指導し、完成した作品の評価を行った際、前述の6課題において、「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」に表現傾向が別れたが、作品の評価において比較的、高評価に抽象的表現の作品が集まり、低評価に具象的表現が集まった様に感じられた。この学生が制作した作品における抽象的表現・具象的表現の分類と評価について、評価方法は評価側の嗜好に偏らない造形要素数を勘案した評価を用いたが、作品の表現として、生活上で目にする具象形体のモチーフの有無で分類を行った為、厳密な分析ではなく、明らかな相関関係があるとは断定できなかった。

本来、造形メソッドを利用した基礎造形教育法は、教員と学生の能力に影響を受けにくいカリキュラムとして開発したものであり、具象的表現志向の高い学生にとって造形メソッドを用いた教育カリキュラムとの親和性が低いというのは、能力差ではないものの、表現志向の違いによって、教

育効果を損なう事から、改善を要する課題だといえる。

そこで小論では1999年度～2008年度のまで、岐阜市立女子短期大学生生活デザイン学科で行われた基礎造形の授業で、制作された学生の作品の調査を行う。そして、そこで作品中に描かれた「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」を抽出し、その比率と作品の評価を集計することで、表現志向と作品完成度との関係を明らかにしたい。また作品に描かれた、個々の「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」を抽出・分析し、表現志向と関係する作品制作過程における問題点の検証を試みる。

III 結果・考察

基礎造形の授業で制作された全ての作品のうち、表現志向の差は全ての課題において出現したのではなく、一部の課題において出現した。その課題は、「平行線による構成 透明視」、「ネガティブな線の構成 断線」、「ネガティブな線の構成 欠線」、「欠損した円の構成」、「同形分割と等量分割」、「同形単一ユニットによる平面充填」の6課題である。そこで本章では表現志向の差が表れた6課題について調査・分析を行い、以下に述べる。

1 各課題と出現率の関係

作品中に描かれた「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」を抽出し、その比率と作品の評価について集計を行った。各課題で提出された作品中に占める具象表現の割合と、具象表現の出現率は、(表.4) のとおりである。

課題名	具象/作品数	具象表現出現率
透明視の構成 ⁵	99/367	27%
断線の構成 ⁶	37/382	9.7%
欠線の構成 ⁷	75/361	20.8%
欠けた円の構成 ⁸	142/370	38.4%
分割の構成 ⁹	268/340	78.9%
平面充填の構成 ¹⁰	23/324	7.1%

表. 4 課題と出現率の関係

また（表.4）のから分析を行い、以下のような傾向、結果が明らかとなった。

- ① 課題によって具象表現の出現率は異なる。
- ② カリキュラムの一部において課題が進行するにつれて、具象表現の出現率が高くなる傾向がある。（赤字の箇所）

2 作品の分類・分析

各作品に描かれた「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」を抽出・分析し、表現志向と関係する作品制作過程における問題点の検証を試みた。それぞれ各課題に出現した具象表現の作品において、その課題の出題意図との適合性（適合型・中間型・非適合型）と作品評価（高・中・低）に分類し、分析を行った。

以下に各課題の代表的な作品分析の例を挙げ、述べる。

1) 「平行線による構成 色による透明視」

平行線によって透明視を試みる課題である。色彩の視覚効果を効果的に利用することによって、平行線による半透明と認識されるような透過壁を形成させる。そして更に、平行線の間を平行線を引くことによって、透過壁の先に見える視覚像を形成させる。

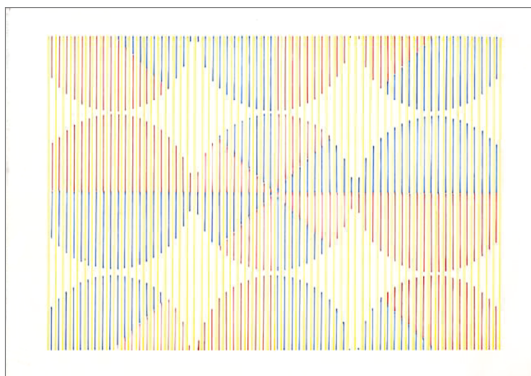


図.1 幾何学形体による抽象作品

①具象表現（課題適合型・評価高）

作品（図.2）は、手をモチーフとした「具象的表現」であるが、平行線の数も多く、透過壁を形

成し、透明視が表現できている。課題の出題意図に添っており、配色にも複数の色が使用されるなど工夫が見られ、時間をかけて丁寧に制作されていることから評価高となっている。

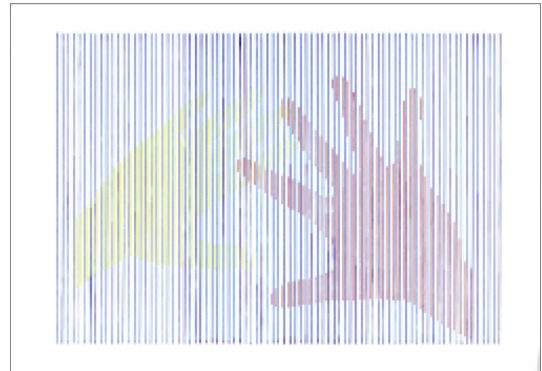


図.2 透明視「手」

②具象表現（課題適合型・評価中）

作品（図.3）は、魚をモチーフとした「具象的表現」であり、平行線の数も充分あり、透過壁を形成し、透明視が表現できている。課題の出題意図に添っており、配色はトーンオントーン配色の原則に従っている。モチーフの形が魅了に欠けており、構成にも工夫が乏しい。また、やや平行線の数が少ないことから評価中となっている。

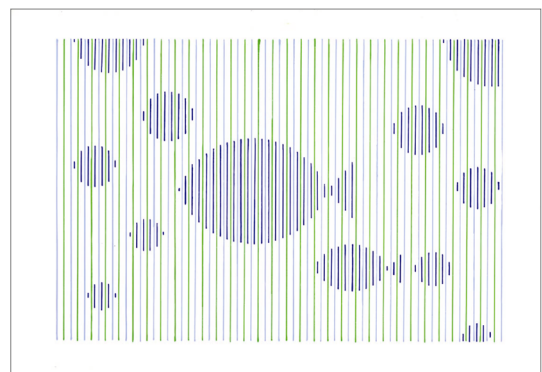


図.3 透明視「魚」

③具象表現（課題中間型・評価中）

作品（図.3）は、碇をモチーフとした「具象的表現」であり、平行線の数も充分あり、透過壁を形成し、透明視が表現できている。

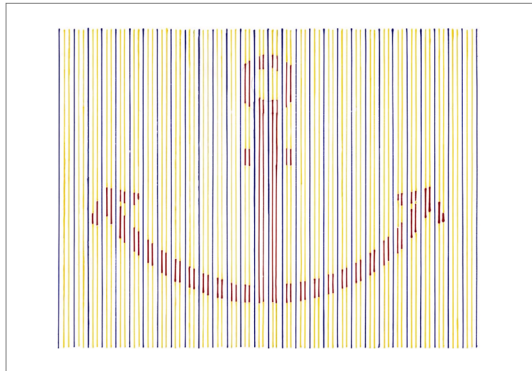


図.4 透明視「碇」

但し、地と図の間で異なる2色によって平行線を継いでいるなど、課題の出題意図から逸脱している表現もみられる。また配色は補色を用いアクセントをつけるなど、工夫されているが、若干、透明視の表現を損ねている。モチーフの形は魅力的だが、平行線を異なる色で継いでいる点と、透明視が損なわれている点から評価中となっている。作品（図.5）は、林檎をモチーフとした「具象的表現」であり、平行線の数も充分あるが、実際の透過壁は青色のみで、透明視が表現できているとは言い難い。また異なる色によって平行線を継い

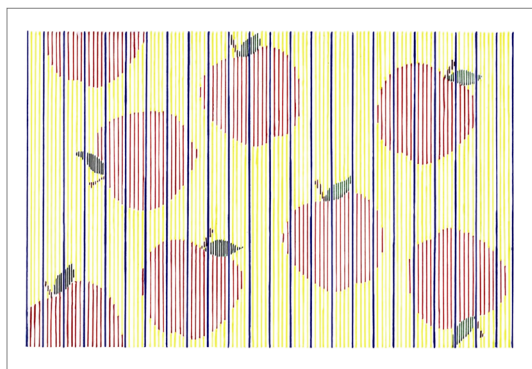


図.5 透明視「林檎」

でいる箇所が多く、課題の出題意図からずれている。また配色は補色を用いアクセントをつけるなど、工夫されているが、透明視の表現を損ねている。モチーフである林檎の形は良く表現出来ているが、課題の出題意図とは離れている。先の（図.4）より表現のレベルは低いものの平行線を多く用い、努力が認められることから、評価中となっている。

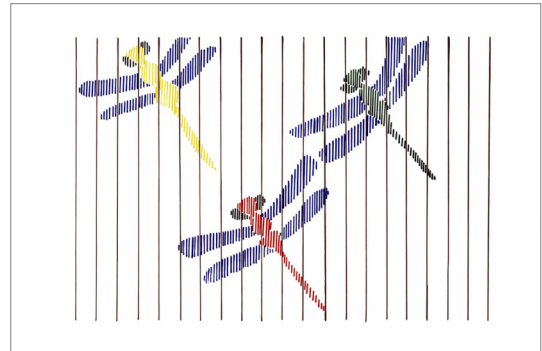


図.6 透明視「トンボ」

④具象表現（課題中間型・評価低）

作品（図.6）は、トンボをモチーフとした「具象的表現」である。基本的に課題の出題意図に添っているが、平行線の数も少なく、透過壁の形成ができているとは言い難い。また図となるトンボの平行線を異なる色によって継いでおり、形もモチーフの観察がされているとは言い難い。そして全体的に平行線が少なく、作品に対する努力が見受けられないことから、評価低となっている。

2) ネガティブな線による構成 断線

「ネガティブ」とはゲシュタルト心理における「地」に相当する表現である。平行線を多数引くと面かが発生するが、平行線の一部を完全に切断し取り除くと、そこに空白の地が露出する事になる。切断した空白は、基本的には背景（地）であるが、大きさ、形によっては注意の転動性が発生し、図（ネガティブな像）となる。

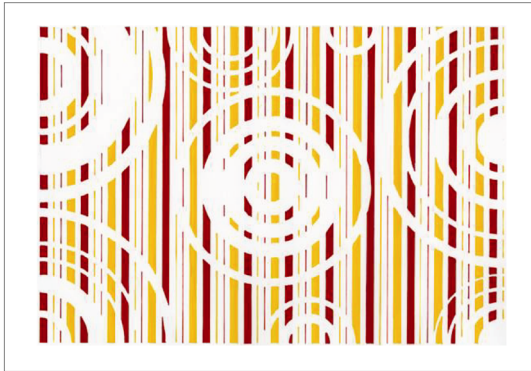


図. 7 断線による抽象作品

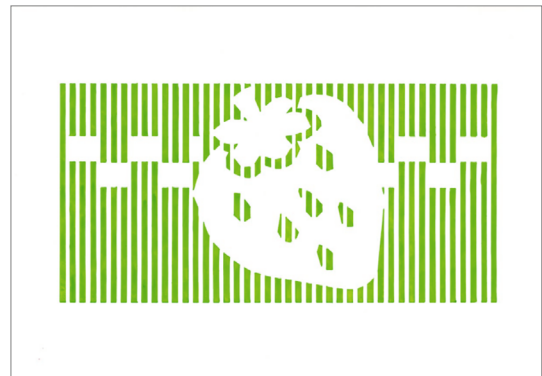


図. 9断線「苺」



図. 8 断線「星と月」

①具象表現（課題適合型・評価高）

作品（図.8）は、星と月をモチーフとした「具象的表現」であるが、平行線の数も多く、各線毎に補色やグラデーションによって色を変えるなど、配色に工夫が見られる。またネガティブな像に関しても、平行線を一律に削除するのでは無く、像が失われない程度に繋げるなどの工夫が見られ、時間をかけて丁寧に制作されていることから評価高となっている。

②具象表現（課題適合型・評価中）

作品（図.9）は、苺をモチーフとした「具象的表現」であるが、平行線の数も多く、鮮明な像が表現されている。しかし平行線に1色しか用いていないため、やや画面は単調な表現になっている。またネガティブな像に関しては、苺の像が描かれているが、単純な形で、やや魅力的に欠けていることから、評価中となっている。

③具象表現（課題中間型・評価高）

作品（図.10）は、アゲハ蝶をモチーフとした「具象的表現」であり、平行線の数も適切である。ネガティブな像において、一部で平行線が完全に切断されていない箇所や、平行線が無視した形で描かれている為、課題の適合性は中とした。但し、繊細なアゲハ蝶の像が表現されており、平行線は1色だが、太さを漸進変化させ、画面にアクセントを与えるなど工夫が見られる為、評価高となっている。



図. 10断線「アゲハ蝶」

④具象表現（課題中間型・評価中）

作品（図.11）は、雄鳥をモチーフとした「具象的表現」であり、平行線の数も適切で、ネガティブな像も鮮明に表現されている。平行線は1色しか使用していない為、やや画面が単調となり、評価は中に留まっている。また断線表現に関しても、切断・除去ではなく平行線間で、地と図が反転し

て用いられている為、課題の適合性が中となっている。

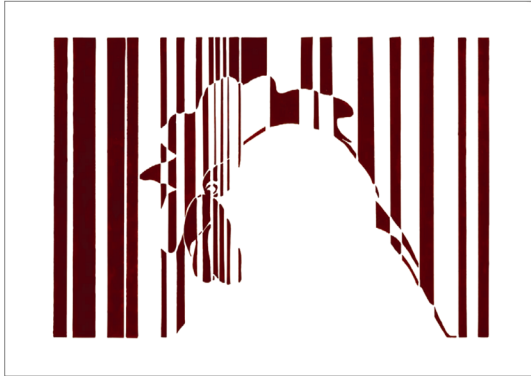


図.11 断線「雄鳥」

力に欠けている。以上の理由から非適合型・評価低となっている。

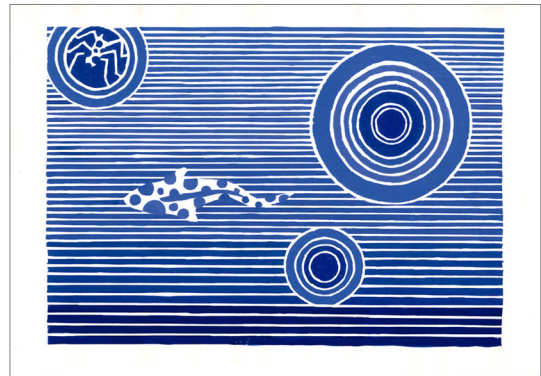


図.13断線「錦鯉」

⑤具象表現（課題非適合型・評価低）

作品（図.12）は、向日葵をモチーフとした「具象的表現」であるが、向日葵を表現する為に、平行線1本において異なる色を使用しており、課題の出題意図で示したようなネガティブな像が表現されていない。また向日葵の表現も観察力・描写力が不足しており、平行線の太さも造形力の不足から不均一である。以上の理由から非適合型・評価低となっている。



図.12 断線「向日葵」

作品（図.13）は、水の中で泳ぐ錦鯉をモチーフとした「具象的表現」である。但し、錦鯉、波紋を表現する為に、平行線の切断ではなく、別の図形を乗せており、課題の出題意図で示したような方法で、ネガティブな像が表現されていない。また錦鯉の観察力も不足しており、波紋の表現も魅

3) ネガティブな線による構成 欠線

欠線は断線と同様に、ネガティブな像による表現であるが、断線のように平行線を完全に切断するのではなく、平行線を一定の方向から削り取ることによって、ネガティブな像を形成している。断線の表現と比較して、削る取る量によって、像の鮮明さを加減できる為、より複雑な表現が可能となっている。



図.14 欠線による抽象作品

①具象表現（課題適合型・評価高）

作品（図.15）は、四つ葉のクローバーをモチーフとした「具象的表現」である。平行線の数も多く、個々の線の太さも異なる。また外形の工夫がなされているなど工夫が見られ、時間をかけて丁寧に制作されており、評価高となっている。

作品（図.16）は非常口のサインをモチーフとし

た「具象的表現」である。平行線の数も適切であり、白い地との対比が鮮明に表現されている。単純な視覚像ではあるものの、丁寧に制作されていることから評価高となっている。

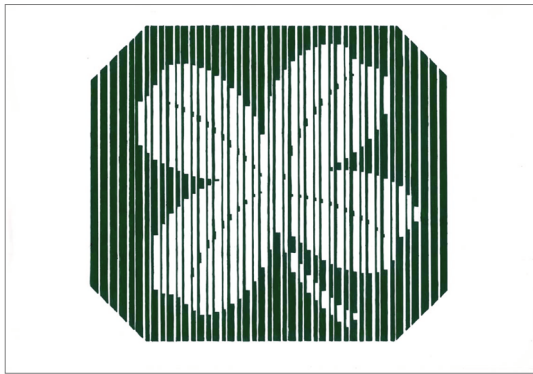


図. 15 欠線「四つ葉のクローバー」



図. 16 欠線「非常口サイン」

②具象表現（課題中間型・評価高）

作品（図.17）は蝶をモチーフとした「具象的表現」である。蝶の羽根に一定方向ではなく反対から欠損している箇所や、触覚に線に接触していない図が見られる事から、課題中間型となっている。しかし平行線の数も多く、グラデーションなどの色彩の工夫もみられ、丁寧に時間をかけて制作をしていることが伺えることから、評価高としている。



図. 17 欠線「蝶」

③具象表現（課題中間型・評価低）

作品（図.18）は足跡をモチーフとした「具象的表現」である。平行線に中空の箇所が多くあり、課題の制作条件を大きく逸脱している。また足跡の形体も均整がとれておらず、造形的な魅力に欠けている。以上の理由から、課題中間型・評価低となっている。



図. 18 欠線「足跡」

③具象表現（課題非適合型・評価低）

作品（図.19）は苺をモチーフとした「具象的表現」である。平行線に中空の箇所が多くあり、苺の像は並行線とは異なる図を作成し、乗せているなど、課題の制作条件を大きく逸脱している。また苺に対する観察力・表現力も乏しく、造形的な魅力に欠けている。以上の理由から、課題中間型・評価低となっている。

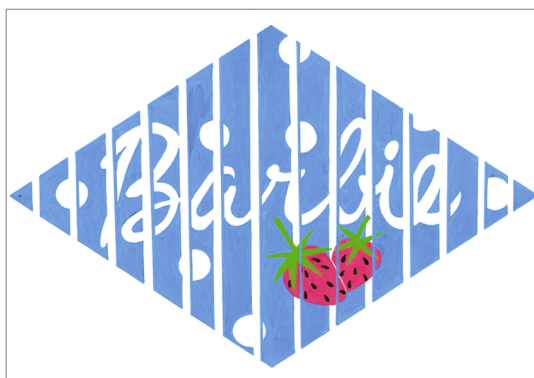


図. 19欠線「苺」

所によって見え方も変化しており，評価高となっている。



図. 21 欠円「王冠」

4) 欠損した円による構成

円を欠損させることによって円の持つ「完全」という象徴性を破壊し，地に表れるネガティブな像の造形的な美しさを表現している。また円の向き，組み合わせ方によって，表現に変化を与える事が可能である。

①具象表現（課題適合型・評価高）

作品（図.21）は，王冠をモチーフとした「具象的表現」である。円の数も適切で，配色も明度によるグラデーションを用い，工夫されている。また個々に表れる王冠の像も繊細に表現されており，箇所によって見え方も変化していることから，評価高となっている。

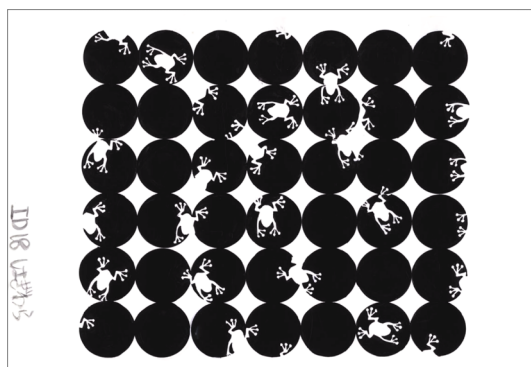


図. 22 欠円「蛙」

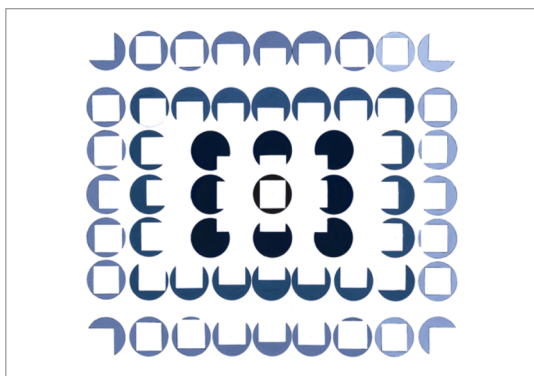


図. 20 欠円による抽象作品

作品（図.22）は，蛙をモチーフとした「具象的表現」である。円の数も多く，配色はスミ1色であるものの，繊細で明快な蛙の像を表現するのに適切となっている。また個々に表れる蛙の像も，箇所

②具象表現（課題中間型・評価高）

作品（図.23）は，林檎をモチーフとした「具象的表現」である。円の数も適切であり，配色も表現に林檎の木を表現するのに応じて適切に選択されている。但し，林檎の木を表現するのに志向が傾注され，個々のユニットの欠損の仕方，組み合

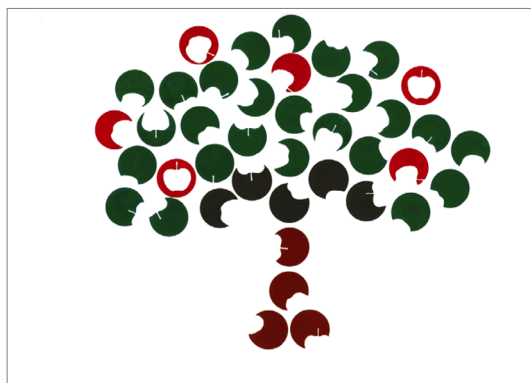


図. 23 欠円「林檎の木」

わせ方に工夫が見られない。以上の理由から課題中間型となっている。

作品（図.24）は、林檎をモチーフとした「具象的表現」である。円の数は適切であり、配色も表現に林檎の木を表現するのに応じて適切に選択されている。但し、林檎表現するのに志向が傾き、個々のユニットの欠損の仕方、組み合わせ方に工夫が見られず、茎、葉を加えたのは課題の制作条件から逸脱している。以上の理由から課題中間型となっている。

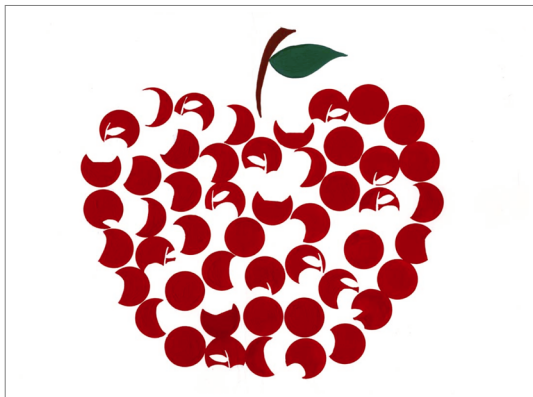


図. 24 欠円「林檎」

③具象表現（課題非適合型・評価低）

作品（図.25）は、犬をモチーフとした「具象的表現」である。円を欠損させるのではなく、犬の図を重ね合わせており、制作条件から大きく逸脱している。また犬に対する観察力・描写力も不足しており、課題非適合型・評価低となっている。

作品（図.26）は、花をモチーフとした「具象的表現」である。円を欠損させているが、ネガティブな像を表現しているのではなく、欠損した円を組み合わせ花を表現している。また直線など制作条件から逸脱した構成要素が多く用いられており、表現上も造形的魅力に乏しい。以上の理由から課題非適合型・評価低となっている。

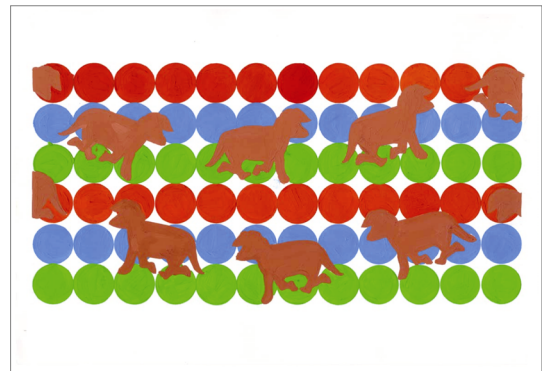


図. 25 欠円「犬」

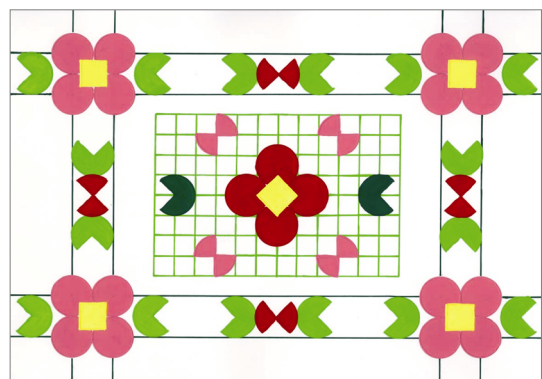


図. 26 欠円「花」

5) 同形分割と等量分割

同形分割は、画面を分割し2色に塗り分けたときに、2色の像が同じ形になる表現である。2色を分割する線は必ず正方形の中心をとおり、2色は点対称の図形となる。

等量分割は画面を分割し2色に塗り分けたときに、2色の面積がほぼ等しくなる表現である。面積を等しく測る為にグリッドを用い、2色の増減を行う。



図. 27 分割による抽象作品

①具象表現（課題適合型・評価高）

同形分割と等量分割による作品（図.28），（図.29），（図.30），（図.31），（図.32）は，それぞれ「鳩とレモン」，「蝶と女性」，「薔薇と蝶」，「花と懐中時計」，「縞馬と顔」をモチーフとした「具象的表現」である。

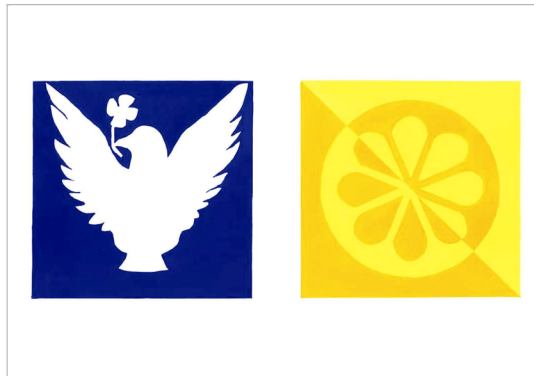


図. 28分割「鳩・レモン」



図. 29分割「蝶・女性」

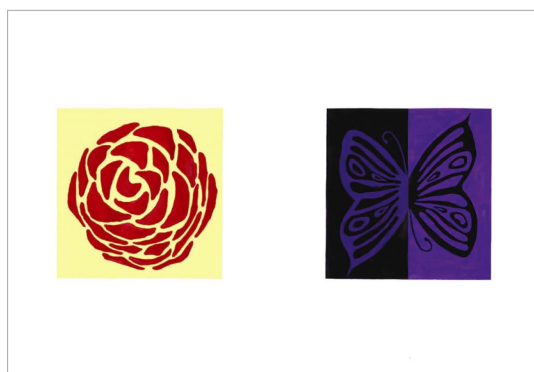


図. 30分割「薔薇・蝶」

いずれの作品も制作条件，課題意図を十分に満たしている。また地及び図に表れる像の表現も明

快，若しくは繊細となっており，造形的魅力も高い。以上の理由から，評価高となっている。



図. 31分割「花・懐中時計」

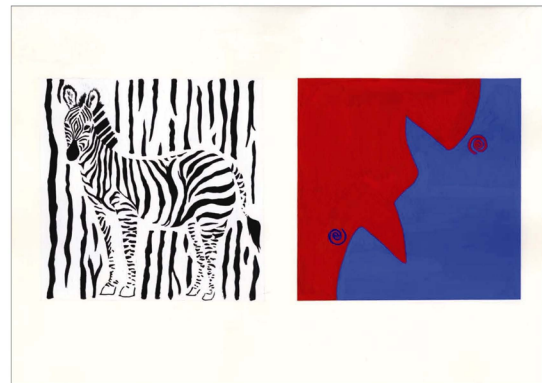


図. 32分割「縞馬・顔」

②具象表現（課題中間型・評価中）

作品（図.33）は，ドナルドダックと林檎をモチーフとした「具象的表現」である。等量分割は制作条件，課題意図を満たしているものの，同形分割はモチーフの表現に制作志向が傾注し，図像に主線を用いるなど，制作条件を逸脱している。以上の理由から課題中間型・評価中となっている。

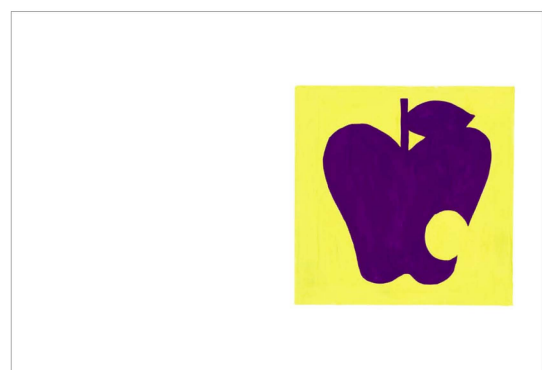


図. 33分割「ドナルド・林檎」

③具象表現（課題非適合型・評価中）

作品（図.34）は、風車と蝙蝠をモチーフとした「具象的表現」である。等量分割は制作条件、課題意図を満たしており、表現も繊細である。しかし同形分割は地と図の2色において点対称図形となっておらず、制作条件を逸脱している。以上の理由から課題非適合型・評価中となっている。

④具象表現（課題非適合型・評価低）

作品（図.35）は、林檎をモチーフとした「具象的表現」である。等量分割は林檎の表現に制作志向が傾注された為、茎や葉を異なる色で描いており、制作条件を逸脱している。また同形分割も、地と図の2色による制作になっておらず、同形分割とは言い難い。以上のような理由から課題非適合型・評価低となっている。



図. 34 分割「風車・蝙蝠」

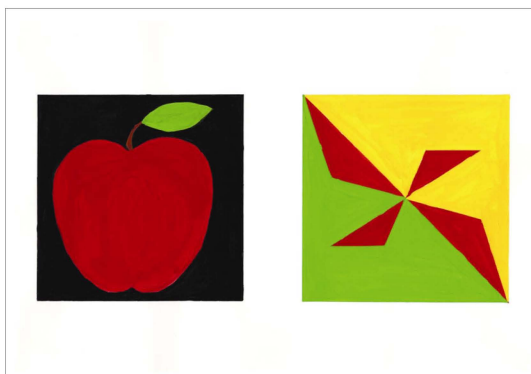


図. 35 分割「林檎」

作品（図.36）は兎と林檎をモチーフとした「具象的表現」である。等量分割は（図.35）と同様に、林檎の表現に制作志向が傾注された為、茎や葉を

異なる色で描いており、制作条件を逸脱している。また同形分割も、兎の表現制作志向が傾注された為、大きく制作条件から逸脱している。以上のような理由から課題非適合型・評価低となっている。

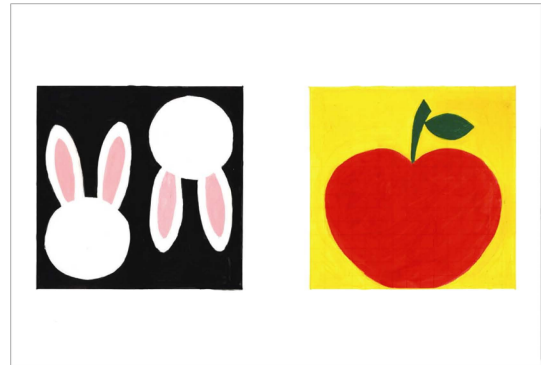


図. 36 分割「兎・林檎」

作品（図.37）は、ドナルドとミッキーをモチーフとした「具象的表現」である。

いずれもモチーフの表現に制作志向が傾注された為、単なるイラストとなっており、制作条件を大きく逸脱している。以上のような理由から課題非適合型・評価低となっている。

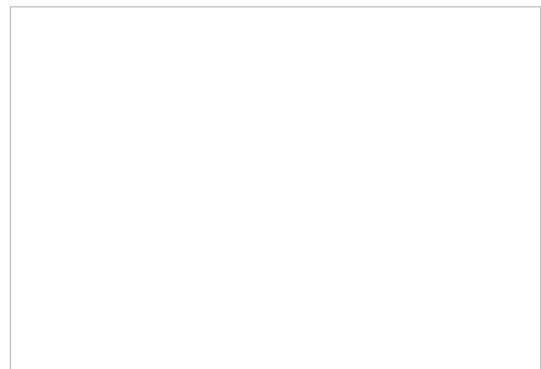


図. 37 分割「ドナルド・ミッキー」

6) 同形単一ユニットによる平面充填

平面充填が可能な正多角形は、正三角、正方形、正六角形の3つであり、基本的には、これらの形接を変形、組み合わせる事によって、点の接合（マッチング）を行っている。また充填に変化を持たせるために、組み合わせの際にユニットの回転、移動を行っている。また各ユニットは単色で塗られ、隣接するユニット同色ならない様に、配色に気をつけなくてはならない。

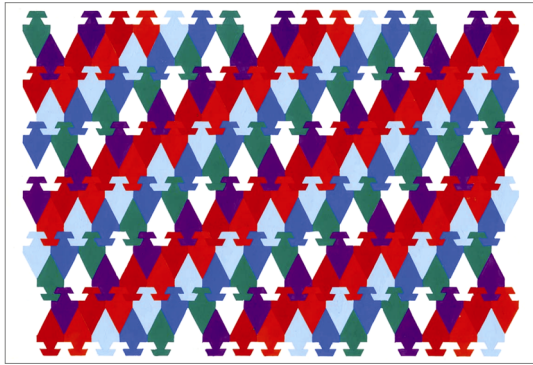


図. 38 平面充填による抽象作品

①具象表現（課題適合型・評価高）

作品（図.39）は、ヨットをモチーフとした「具象的表現」である。長方形による平面充填を基本に、ユニットを変形，移動させることによって波を形成し，最後にヨットの像を加えている。配色も青系統のドミナント配色による，涼しげな表現であり，評価高となっている。

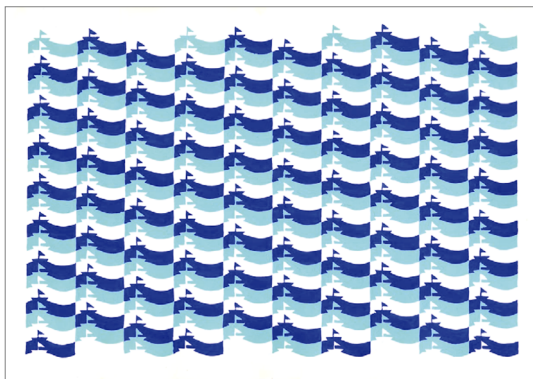


図. 39 平面充填「ヨット」

作品（図.40）は，猫をモチーフとした「具象的表現」である。正方形による平面充填を基本に，猫の像を加え，ユニットを変形，垂直に移動させ，画面に変化を与えている。配色は緑系統と無彩色による組み合わせで，落ち着いた表現となっており，評価高となっている。

作品（図.41）は，蛙をモチーフとした「具象的表現」である。菱形による平面充填を基本にユニットを変形，垂直に移動し重ねることで形体を乗除させ，最後に蛙の像を加え，ユニットに変化を与えている。配色は蛙の個有色のイメージに近い，

黄・黄緑・緑といった類似色による配色でまとめられており，評価高となっている。



図. 40 平面充填「猫」

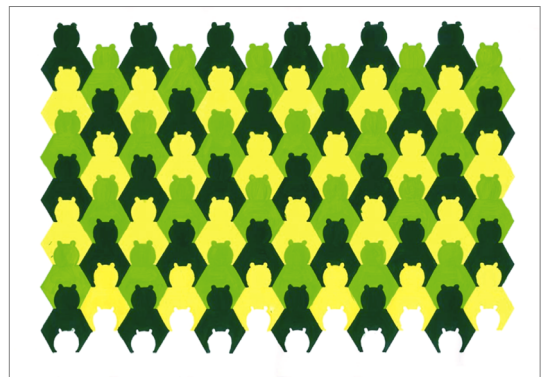


図. 41 平面充填「蛙」

作品（図.42）は，アルファベットのKをモチーフとした「具象的表現」である。平行四辺形による平面充填を基本に，Kの像を加えることで，繊細な像を形成している。配色は黄・茶・黒といったトリコロール配色で落ち着いたイメージでまとめられており，評価高となっている。



図. 42 平面充填「K」

②具象表現（課題中間型・評価高）

作品（図.43）は、Tシャツをモチーフとした「具象的表現」である。正方形による平面充填を基本に、猫の像を加え、ユニットを変形、垂直に移動させ、画面に変化を与えている。配色は緑系統と無彩色による組み合わせで、落ち着いた表現となっており、評価高となっている。

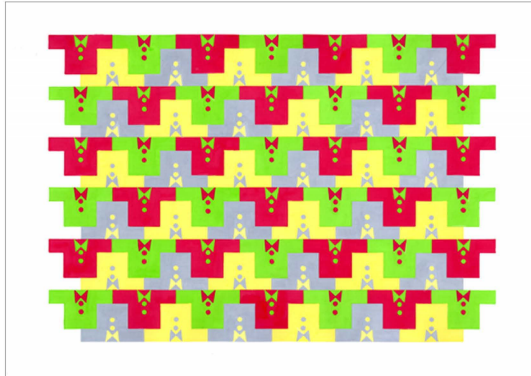


図. 43 平面充填「Tシャツ」

③具象表現（課題非適合型・評価低）

作品（図.44）は、三つ葉のクローバーをモチーフとした「具象的表現」である。しかし基本となる同形・単一ユニットは三つ葉のクローバーではなく、分かり難く、強いて言うのならば四角形だといえる。制作条件、若しくは課題の出題意図を逸脱しており、課題非適合型・評価低となっている。

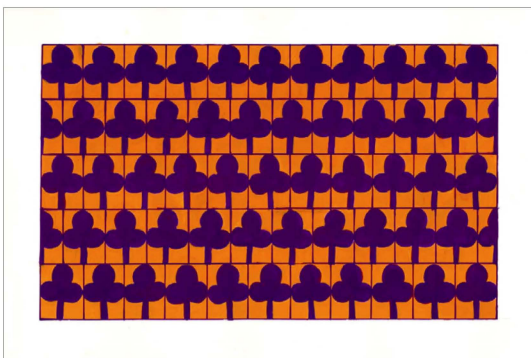


図. 44 平面充填「三つ葉のクローバー」

作品（図.45）は、ミッキーをモチーフとした「具象的表現」である。しかし基本となる同形・単一ユニットが円である為、平面充填になっていない。

制作条件、若しくは課題の出題意図を逸脱しており、課題非適合型・評価低となっている。

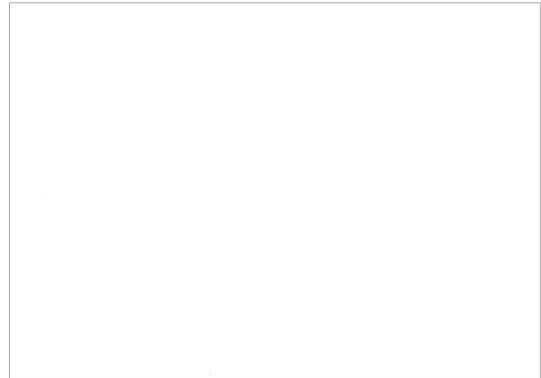


図. 45 平面充填「ミッキー」

3 考察

各課題における出現率と、作品の分類・分析の結果から、「ネガティブな線の構成 欠線」、「ネガティブな線の構成 欠線」、「欠損した円の構成」、「同形分割と等量分割」の課題に、「具象的表現」と「幾何学的・抽象的表現」という、表現志向の違いが見られた。

これらの課題のうち、具象表現の出現率が高い課題の場合は、評価が高くなり、出現率が低い作品の場合は、評価が低くなる傾向が見受けられた。この様に課題によって具象表現の出現率が異なるのは、課題の難易度と、具象形との親和性によるものだと考えられる。故に具象表現の出現率が高い課題は、具象形との親和性が高いために、具象表現を用いた場合でも評価が高くなると思われる。

また完成した作品の評価と学生の志向を比較した結果、具象的表現を志向する学生は、親和性の低い課題でも具象的な表現を行うだけではなく、造形要素への理解度が低い為に、課題の意図が読み取れない場合があり、全体的に成績が低くなる傾向がみられた。

IV 結論

以上の研究経過から、以下の3点をまとめ、結論とする。

① 作品中に具象表現が出現するのは、個人の嗜

好による部分が大きく、具象表現を好む者は、多くの作品で具象表現を用いる傾向がある。これは作者の内的な、具象表現志向の強弱によると考えられる。

- ② 具象表現が出現する割合は、課題の難易度と具象表現との親和性によるところが大きいということである。例えば、作者の具象表現志向が強い場合には、具象表現との親和性が低い課題でも、具象表現を用いる傾向があり、逆に作者の具象表現志向が弱い場合には、具象表現との親和性が強い場合でも、具象的表現を用いない傾向がある。
- ③ 具象表現を志向する者の中には、心象・イメージを追求し、デザイン的な計画性を軽視する傾向が、一部で見受けられる。その為、制作された作品と課題との適合性が低くなり、結果的に作品評価も低くなる。

おわりに

以上、小論では基礎造形教育法における問題の整理と、そこから推定される諸課題の考察を行った。本研究の最終的な目的は、授業における作品制作の際に発生する、具象・抽象の表現志向による個人差を考慮した、基礎造形教育カリキュラムの改良を行うことにある。今後は、その研究過程において、以下の点について研究を進めていく計画である。

- ① 学生に内在する内的なイメージと表現志向のあり方を構造的に視覚化する。
- ② 学生の表現志向から発生する制作モチベーションの様相を明らかにする。
- ③ 学生の表現志向、制作モチベーションと、学生の行う造形表現および作品完成度の関係を調査する。
- ④ ①-③から導き出された、学生の表現志向による造形プロセスのメカニズムの考察をおこなう。
- ⑤ 学生の表現志向と、造形メソッドを用いた教育カリキュラムの教育効果との関係を明らか

にする。

- ⑥ 具象・抽象の表現志向による個人差を考慮した、基礎造形教育カリキュラムへの改良を図る。

本研究は科学研費 基盤研究 (C) (80320951) の助成を受けたものである。

註

- 1 久保村里正, 「高度メディアリテラシー教育に於けるデザイン教育の構成」, 『基礎造形学会論文集 012』, 基礎造形学会, p.33-p.40, 2003
- 2 久保村里正, 「造形要素をインデックスとしたデジタルアーカイブー造形要素の組み合わせによる造形メソッドとデジタルアーカイブ利用」, 『2006年度本部例会学術講演論文集』, 日本図学会, p.55-p.58, 2006
- 3 久保村里正, 「造形要素の組み合わせによる作品評価」, 『2004年度本部例会学術講演論文集』, 日本図学会, p.31-p.34, 2004
- 4 久保村里正, 「造形要素の構造化に基づく基礎造形教育に関する研究」, 名古屋大学大学院・人間情報学研究科・学位論文, p.127-p.128, 2008
- 5 「平行線による構成 透明視」の略
- 6 「ネガティブな線の構成 断線」の略
- 7 「ネガティブな線の構成 欠線」の略
- 8 「欠損した円の構成」の略
- 9 「同形分割と等量分割」の略
- 10 「同形単一ユニットによる平面充填」の略